

外來語的學習觀對於外來語習得之影響

—以台灣日語學習者為對象—

魏志珍

中華大學應用日語學系 助理教授

摘要

本研究主要是以台灣日語學習者 335 名為研究對象，探討學習者的外來語學習觀對於外來語習得有何影響。調查方法是針對受試者實施 (1) 外來語學習觀問卷：採五段式評價法，共 42 題，(2) 外來語的語彙測驗：四擇一的選擇題形式，共 36 題。針對問卷進行因素分析的結果，共抽出 4 個因素。以這 4 個因素為潛在變數，進行以外來語學習觀來預測外來語的語彙測驗結果之結構方程式分析。結果顯示，台灣日語學習者所抱持的外來語學習觀對於外來語習得有所影響，其影響因素可分為抑制性和促進性這兩種。其中，直接影響外來語習得最為顯著的促進性因素為自律學習，而抑制性因素則是英語的貢獻。

關鍵詞：外來語、學習觀、台灣日語學習者、結構方程式、因素分析

受理日期：2017.03.10

通過日期：2017.05.05

**The Influences of Learning Beliefs in Loanwords on
Acquisition of Loanwords:
Focusing on Japanese Learners in Taiwan**

Wei Chih-Chen

Assistant professor, Chung Hua university, Taiwan

Abstract

This study aimed to explore the influences of Japanese learners' learning beliefs in loanwords on their acquisition of loanwords, with 335 Japanese learners in Taiwan being the research subjects. The subjects had to complete (1) a questionnaire about learning beliefs in loanwords, with 42 items measured using the 5-point scale; and (2) a loanword vocabulary test, with 36 four-option items. According to the result of the factor analysis of the questionnaires, four factors were extracted. These factors were used as latent variables to perform structural equation modeling, in order to predict the loanword vocabulary test results based on learning beliefs in loanwords. According to the findings, the learning beliefs in loanwords of the Japanese learners in Taiwan would influence their loanword acquisition. The influential factors can be categorized into facilitating factors and inhibiting factors. The facilitating factor and inhibiting factor with the most significant influence self-regulated learning and contribution of English, respectively.

Keywords: loanwords, beliefs, Japanese learners in Taiwan, structural equation modeling, factor analysis

外来語に対する学習観が外来語の習得に与える影響 —台湾人日本語学習者を対象に—

魏志珍

中華大学応用日本語学科助理教授

要旨

本研究では、台湾人日本語学習者 335 名を対象に、外来語に対する学習観が外来語の習得にどのように影響するかを検討したものである。調査は、調査対象者に対して、(1) 外来語に対する学習観を問う 42 問からなる 5 段階評価法による質問紙、(2) 難易度、使用頻度、品詞の観点に基づいて構成した 36 問の四肢選択式問題による外来語の語彙テストを実施した。質問紙について因子分析を行ったところ、4 因子が抽出された。この 4 因子を潜在変数として、外来語に対する学習観から外来語の語彙テストの得点を予測する構造方程式モデリングの分析を行った。その結果、台湾人日本語学習者の外来語に対する学習観が外来語の習得に影響を与えており、抑制的に働く要因と促進的に働く要因と大きく二つに分かれていた。自律的学習は促進的に働く要因として、英語の貢献は抑制的に働く要因として、外来語の習得に直接に影響していることが明らかになった。

キーワード：外来語、学習観、台湾人日本語学習者、構造方程式モデリング、因子分析

外来語に対する学習観が外来語の習得に与える影響 —台湾人日本語学習者を対象に—

魏志珍

中華大学応用日本語学科 助理教授

1. はじめに

日本語の語彙は、語の出自から、和語、漢語、外来語、混種語の四種類に大別することができるが、その中で、近年特に目立っているのは様々な分野において著しい増加を見せている外来語である。外来語は、一般的に漢語とが区別されて、主に欧米語から日本に入ってきた、カタカナで表記される語彙を指すものである（石綿 1991）。日本語の音韻体系に合わせて表音文字カタカナで表記されるため、外来語は発音上に原語の音韻と異なっている場合が多く、表記上に和語や漢語に比べて書字そのものが長くなりがちである。さらに、意味と用法において原語とのずれがあることや、表記のゆれや語形の短縮もあることから、外来語は多くの日本語学習者にとって苦手な項目として挙げられることが多く、学習者がそれを覚えたり使ったりすることに困難を感じているという報告（陣内 2008；中山ほか 2008 など）も見受けられる。現在、外来語の増加により、日本語学習者も外来語に触れる機会は多くなり、もはや学習上に避けて通れないものになっている。このような実態を受けて、今後も増え続けていく可能性が高い外来語に対しては、効果的な学習支援を考案するために、その習得に関わる要因や問題などを検討することが日本語教育において重要な課題であると言える。

実際、外来語の習得については、これまでに様々な観点から数多くの研究が行われてきている。その中には、心理的な側面から日本語学習者の外来語に対してどのような意識や態度や考え方を持っているのか、その学習観に着目した研究（陣内 2008；堀切 2008、2010、2011；王 2015）もあるものの、いまなお少ないのが現状である。言

語教育では、言語学習に対して学習者が自覚的・無自覚的に抱いている意識や態度や考え方などを学習観¹と言う。学習観は、学習者が目標言語を学ぶ際に影響を与える、学習者自身に関わる要因²の一つとして知られている。Horwitz (1987) によると、学習観は具体的な学習行動を左右するものとし、習得に対して強い影響を与えているとされている。また、学習観は変容させられるものであり、学習者の学習観にある言語学習を阻害する要素を取り除けば、習得を促進できる可能性があるという。このことから、外来語学習においては、日本語学習者の持つ外来語についての学習観がその習得に何らかの影響を与えている可能性が高い。学習観が及ぼす習得への影響を明らかにすれば、外来語の習得を促進するための手掛かりや指導のヒントを見出すことに繋がることになると考えられる。しかし、この点に焦点を当てた外来語研究は未だ見当たらない。

そこで、本研究では、台湾の日本語教育における外来語の指導に有益な知見を見出すために、台湾人日本語学習者を対象に、彼らの外来語に対する学習観を調査し、学習観が外来語の習得にどのように影響するかを実証的に検討する。

2. 先行研究

外国語教育の分野においては、1980年代以降、外国語教授法の革新とともに、言語教育が学習者中心の方向へ向かうようになり、学習者の役割は従来の受動的な学習から能動的な学習に変遷した。そうした転換が図られる中で、学習観は学習者が能動的に学習をコントロールする過程に影響する要因の一つとして注目され、それについての研究が盛んに行われるようになってきている。こうした流れを受け、日本語教育の分野においても学習者の学習観が注目されるよう

¹ 学習観は Belief の訳語である。Belief という用語は、「学習観」のほかに、「信念」、「確信」、「ビリーフ」、「ビリーフス」などにも訳されているが、本研究では「学習観」を用いることにする。

² 学習観のほかに、知能、年齢、言語適性、認知スタイル、動機付け、学習ストラテジーなどがある。

になり、1990年代から現在に至るまで多数な研究がなされてきているが、その多くは言語学習全体に対する学習観を取り扱う研究である。それに対し、特定の項目に対する学習観を取り扱う研究は比較的数量少なく、その中には外来語に対する学習観を調査した主な研究として、陣内（2008）、堀切（2008、2010、2011）、王（2015）が挙げられる。

陣内（2008）は、日本語学習者が外来語学習において感じている困難点やニーズなどを明らかにすることを目的に、日本国内にいる複数国の日本語学習者を対象に意識調査を行った。その結果、日本語学習者の大部分は外来語の学習や使用に困難を感じており、中でも特に中国語を母語とする日本語学習者においてその傾向が強く見られたことを報告している。中国語母語話者の場合、学習上に困難を感じる点として最も多く挙げられたのは、意味推測の難しさである。これは、学習者の母語である中国語に対応する外来語が非常に少ないことに起因するものであると述べている。

堀切（2008、2010、2011）の一連の研究では、主に異文化受容の観点から、英語を母語とする日本語学習者を対象に、外来語に対する意識や受容態度を調査して分析した。具体的には、堀切（2008）では、学習者の外来語に対する意識や受容態度を質問紙で調査した結果、英語を母語とする日本語学習者は、外来語に対して「積極的受容」、「拒絶」、「英語優位性」、「英語干渉」の4つの受容態度を持っていたことが明らかになった。また、堀切（2010）では、学習者が外来語を英語とどのように関連付けて捉えているのかを、日本語学習者に対して半構造化インタビューによって調査した。その結果、外来語を日本語として、すなわちホスト文化の枠組みで捉える学習者は、外来語に対して肯定的な感情を持ちやすい傾向があるのに対し、外来語を英語として、すなわち自文化の枠組みで捉える学習者は、外来語に対して否定的な感情を持ちやすく、その使用も消極的になる傾向があると報告されている。さらに、堀切（2011）では、外来語に対する認識、感情、使用行動と異文化受容態度との関連を

明らかにするため、日本語学習者に対して質問紙で調査を行ったところ、学習者の外来語に対する認識や感情は、外来語の使用に影響を与える可能性があり、さらに異文化受容態度を予測する指標にもなりうることが示された。

王（2015）は、台湾の大学で日本語を第二外国語の選択科目として初めて履修する初心者の学生、すなわち主専攻ではない形で学ぶ初級日本語学習者を対象に、外来語に対する意識調査を2回にわたって行った。その結果、1回目の調査においては、初級日本語学習者の多くは外来語に対してさほど抵抗感がなく、積極的に理解して使用したいという傾向が見られた。それに対し、約5カ月後の2回目の調査においては、外来語の学習が難しく感じるようになり、面倒くさくなったと思う学習者が多く見られたという。このように、日本語学習者の外来語に対する意識は学習が進むにつれて変化するという報告もある。

以上に概観してきたように、外来語に関する学習観の研究において検討されたのは、主に日本語学習者の外来語に対する学習観そのもの、またはその学習観と異文化受容との関連、学習観の経時的な変化であり、その学習観が外来語の習得にどのような影響を及ぼすのかについては検討されていない。実際、これまでのところ、日本語教育の分野においては、数は少ないながらも、学習観と言語習得の習熟度との関係を扱った研究に、岡崎・堀（2000）、尹（2001）、石橋（2006）、盧（2011）がある。岡崎・堀（2000）は、韓国の大学で日本語を主専攻とする学習者を対象に、彼らの日本語に対する学習観をコース開始時点と終了時点の2回に分けて調査し、学習観の変化及び学習観と学年成績との関係を検討したが、学習観は学習期間による変化が見られたものの、大きな変化ではなかった。ただ、学習観と学年成績との間には、一部の項目においてのみ相関関係が見られ、これらの項目で学年成績を予測する可能性があることが報告されている。さらに、尹（2001）は、中国の大学で日本語を主専攻とする中国人日本語学習者が日本語学習に対してどのような学習

観を持っているか、学年による学習観の差異、学習観と日本語能力（学年末の成績）との関連性を検討している。その結果、学習観は学年によって異なるものの、「言語学習の性質」には学年による差が観察されなかった。また、学習観と日本語能力との間には一部の項目において相関関係が見られ、学習観は日本語能力と関わりがあることが示唆されている。この日本語能力との関わりについては、石橋（2006）が日本で大学等進学の前準備教育を受けている複数国の日本語学習者を対象に文章産出に関する学習観を調査し、日本語習熟度と学習観との関連を検討している。調査から、プレメントテストで分けた日本語習熟度が高い上位群と低い下位群の文章産出に対する学習観は、一部の項目において差が見られたことが報告され、尹（2001）を一部支持する結果となっている。そのほか、学習者は主題の明確さの必要性、構成の重要性、読みとの関連の重視などの学習観を強く持っていることが観察された。また、盧（2011）は、台湾の大学で日本語を主専攻とする台湾人日本語学習者を対象に日本語の学習観と学習ストラテジーを調査し、その両者は性別による差異、高校での学習経験の有無による差異、日本語習熟度（日本語能力試験 N1・N2 合格者と N3・N4・N5 合格者）の高低による差異があるかを検討した。その結果、学習者の学習観と学習ストラテジーは、性別、学習経験の有無、日本語習熟度の高低による違いが見られたものの、そのうち、日本語習熟度による学習観の違いは「学習者の自律性」においてしか認められなかったという。このように、学習者が持つ言語に対する学習観は、彼らの言語習得の習熟度によって違いが見られ、学習観と言語習熟度との間に相関（つまり、両者は関係性があったこと）が一部示されてはいるものの、本当に学習観が習熟度を決定付けているのか、という点までは明らかになっていない。先行研究では、言語習熟度で分けた高い群と低い群の言語に対する学習観を比較する手法を取っているため、言語習熟度による学習観の違いを見出すことはできても、学習観と言語習熟度との間にどのような因果関係が存在するのか、というところにはアプ

ローチできていない。

そこで、本研究では、以上のことを踏まえ、台湾人日本語学習者の外来語に対する学習観を調査し、調査紙の項目から因子分析を行い、学習者の学習観についての構成概念を抽出した後、それらが外来語の習熟度とどのような因果関係にあるのか、両者の関係を構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling: SEM) の手法によって検討する。本研究は、外来語の習得研究で対象にされてこなかった、外来語の学習観がその習得に与える影響を明確にすることを目的とする。具体的には、(1) 台湾人日本語学習者が外来語に対してどのような学習観を持っているのか、(2) その学習観が外来語の習得にどのような影響を与えるか、の2点を研究課題とする。

3. 研究方法

3.1 調査対象者

本研究は、2014年11月から12月にかけて、台湾の北部にある3つの大学で日本語を専攻する台湾人日本語学習者335名(男性90名、女性245名)を対象に調査を行った。彼らの平均年齢は22歳1カ月で、平均日本語学習歴は3年9カ月であった。

3.2 質問紙の作成

質問紙の作成にあたって、本研究では同じく質問紙で調査した陣内(2008)及び堀切(2008、2011)の研究で用いられた質問項目を参考にして、独自に作成した。質問項目は外来語についての学習観を問うもので、主に外来語学習についての困難度、重要性、自律性および英語知識の貢献に関わるものを中心に42問を設けた(詳細は付録を参照)。各質問項目に対して、「強く思う(5点)」「思う(4点)」「どちらでもない(3点)」「思わない(2点)」「強く思わない(1点)」までの5段階尺度で回答を求めた。また、回答者の年齢、性別、日本語学習歴などの基本情報を把握するために、質問紙の最初にフェイスシートを添えた。質問紙は日本語で作成したが、本調査では調査対象者が質問紙の内容をより正確に理解できるよう、全ての内

容を中国語に翻訳して用いた。中国語版への翻訳にあたっては、筆者がまず全ての内容を訳し、その後中国語を母語とする台湾人日本語教師 3 名によりバックトランスレーションを行い、項目の表現を検討した。また、本調査に先駆け、日本語学習者 5 名を対象に予備調査を実施し、質問紙全体の分量や言葉の表現などの項目内容を精査した。

3.3 外来語の習熟度の測定

外来語の習得については、本研究では調査対象者の外来語がどの程度まで習得されているのか、その習得状況を客観的に把握するために、魏 (2016) によって作成した外来語の語彙テストを実施した。この語彙テストは、日本語学習者の外来語習熟度を測定するために作成したものであり、その構成は図 1 の通りに、難易度 (旧日本語能力試験 1・2 級) と使用頻度 (高・低) の観点から品詞 (名詞・形容詞・動詞) ごとに 3 語ずつ均等に配分した 36 問となっている。

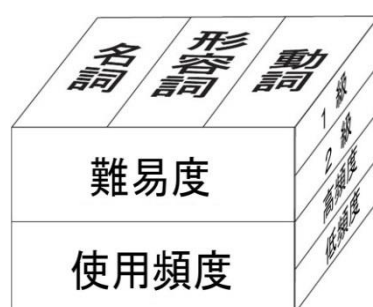


図 1 魏 (2016) の設問構成モデル

設問語彙に関して、魏 (2016) は難易度において旧日本語能力試験配当級の 1 級もしくは 2 級とされている外来語から品詞ごとに語彙を 3 語ずつ選定した。使用頻度においては、『毎日新聞』11 年分 (2000～2010 年) の語彙の中で、使用頻度の高い外来語と低い外来語から品詞ごとに語彙を 3 語ずつ選定した。出題形式は、短い設問文中の空所に入れる語として最も適切なものを、4 つの選択肢から 1 つ選ぶという選択形式である。例えば、「外はとても寒いので、() を着て出かけたほうがいい。」という質問に対して、「コート」が正

答であるが、錯乱肢として「スカート」「ワンピース」「スーツ」が用いられ、これらの四択から1つ適切な語彙を選択する。テストの配点は1問1点で、36点が満点となる。

この語彙テストを用いて、日本語学習者335名に対して実施した結果、最高が36点、最低が6点、平均は21.73点で、標準偏差は5.63点であった。

3.4 調査方法

調査は、全て授業中に実施し、筆者または授業の担当教師がその場で回収した。学習者には、調査実施の目的、回答用紙の記入方法と本調査が成績評価に関与しないことを伝えた上で記入してもらった。手順としては、外来語に対する学習観の質問紙を記入してもらった後に、外来語の語彙テストを実施した。調査の所要時間は約30分程度であった。

3.5 分析手法

本研究では、設けた2つの研究課題に対して次の手法で分析する。まず、研究課題(1)に関しては、質問紙調査で得られた外来語に対する学習観の結果について、因子分析を行って検討する。次に、研究課題(2)に関しては、外来語に対する学習観と外来語の習得との関係を解明するために、研究課題(1)で抽出された因子から外来語の語彙テストの得点を予測する構造方程式モデリング(SEM)による分析で検証する。

構造方程式モデリング(SEM)は共分散構造分析とも呼ばれ、多変量解析の一つとして知られている。構造方程式モデリングは、観測データの背後にある様々な要因の関係を同時に分析する統計的アプローチである(豊田 2011)。ある事象に対して、直接計測されるもの(例えば、質問紙の項目、テストの得点など)を観測変数と呼び、直接観測されない構成概念(例えば、因子、習熟度など)を潜在変数と呼ぶ。具体的には、観測変数を基にして潜在変数を導き、研究者が想定した変数間の因果関係(ある変数が別の変数に影響を与える)をモデル化し、種々の適合度指標を参照してモデルとデータと

の適合度を検証することによって、いくつかのモデルの中から最も適切なものを選び出す解析法である。こうした分析手法は、近年の第二言語習得研究においても使われている³。

4. 結果と考察

4.1 外来語に対する学習観の分析結果

台湾人日本語学習者の外来語に対する学習観の構造を明らかにするため、逆転項目の処理を行った後、全 42 項目に対して最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値 1 以上を基準とし、初期解における固有値の減衰状況（第 1 因子から順に 6.82, 4.72, 3.10, 1.84, 1.60, 1.55, …）から、第 5 因子以降は減衰が緩やかになっていることを確認でき、因子の解釈可能性も考慮したうえで、4 因子解が妥当であると判断した。そこで、4 因子を仮定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その後、負荷量が 0.40 に満たない項目を分析から外し、再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。最終的な分析結果は、表 1 に示した通りである。

第 I 因子の項目は、「8. 日本語の語彙の中で、外来語は最も覚えにくい」「10. 新しい外来語がどんどん増えているので、それを覚えるのは大変だ」「11. 外来語を努力して覚えても、すぐに忘れてしまう」など、外来語を学習する過程で感じている困難度を問う項目からなるため、〈学習困難度〉と命名した。

第 II 因子の項目は、「41. 外来語の意味を英語で推測するのは簡単だ」「39. 英語を通して、外来語を勉強したほうが効率的だ」「37. 外来語の意味は、英語と似ている」など、外来語の学習において既習した英語の語彙知識が果たす役割を問う項目からなるため、〈英語の貢献〉と命名した。

³ 例えば、韓国語を母語とする日本語学習者の語彙知識がオノマトペの習得に与える影響を検討した玉岡・宮岡・金・林（2011）や、中国人日本語学習者による語彙・文法知識から述部構造の理解を仲介とした読解への因果関係モデルを検証した初・玉岡（2013）などがある。

第Ⅲ因子の項目は、「24. 知らない外来語に出会ったら、その意味を調べたり人に尋ねたりすることがよくある」「25. もっと外来語を理解して使用したい」「26. 授業以外でも外来語の自習が必要である」など、外来語の学習への取り組みと姿勢を問う項目からなるため、〈自律的学習〉と命名した。

第Ⅳ因子の項目は、「15. 外来語が使えないと、日本人とうまく会話ができない」「12. 外来語をもっと知らないと、日本語が上達しない」「16. 新しい物事や概念を表すには、外来語が欠かせない」など、日本語学習における外来語の重要性を問う項目からなるため、〈重要性への認知〉と命名した。

表 1 外来語に対する学習観の因子分析結果

項目内容	因子			
	I	II	III	IV
第Ⅰ因子：学習困難度 $\alpha=0.87$				
8 日本語の語彙の中で、外来語は最も覚えにくい	0.74	-0.08	-0.01	-0.07
10 新しい外来語がどんどん増えているので、それを覚えるのは大変だ	0.73	0.04	0.05	-0.07
11 外来語を努力して覚えても、すぐに忘れてしまう	0.72	0.04	-0.10	-0.05
9 外来語をいくら勉強しても、自分が使える外来語は限られている	0.68	0.02	-0.08	-0.07
3 外来語のカタカナ表記が覚えにくく、正確に書くのが難しい	0.63	0.02	0.09	-0.04
2 読み物を読む時に、外来語は他の語彙より意味を推測しにくい	0.62	-0.19	0.09	0.01
6 外来語は表記が長ければ長いほど、正確に書けない	0.62	0.11	0.07	0.11
4 何かを聞く時または会話する時に、外来語は他の語彙に比べ正確に聞き取れない	0.59	-0.03	0.11	0.04
7 外来語を覚えていても、会話する時または文章を書く時にうまく使えない	0.57	-0.02	-0.22	0.11
5 日本語の語彙の中で、外来語が最も発音しにくい	0.45	-0.06	-0.02	0.07
1 外来語の発音は難しく、正確な発音で話すのが難しい	0.41	0.00	0.07	0.10
第Ⅱ因子：英語の貢献 $\alpha=0.85$				
41 外来語の意味を英語で推測するのは簡単だ	-0.04	0.79	0.04	-0.02

39	英語を通して、外来語を勉強したほうが効率的だ	0.04	0.72	0.09	0.03
37	外来語の意味は、英語と似ている	-0.07	0.69	-0.15	0.04
40	英語能力と外来語の学習は強く関連している	0.06	0.66	0.02	0.12
33	英語が得意な人は外来語も得意だ	-0.02	0.63	-0.02	-0.03
35	知らない外来語があったら、英語で意味を推測すればよい	-0.03	0.61	0.15	-0.12
38	英語の語彙知識は、外来語の学習に役立つ	0.08	0.61	0.10	0.10
42	外来語の発音は、英語と似ている	-0.09	0.58	0.01	-0.14
34	英語ができれば、外来語の学習はあまり努力しなくてよい	-0.07	0.47	-0.27	0.05
第Ⅲ因子：自律的学習 $\alpha=0.61$					
24	知らない外来語に出会ったら、その意味を調べたり人に尋ねたりすることがよくある	0.12	0.05	0.67	-0.20
25	もっと外来語を理解して使用したい	-0.08	0.07	0.58	0.07
26	授業以外でも外来語の自習が必要である	0.06	0.01	0.56	0.11
28	普段、教科書に出ている外来語しか勉強しない	-0.25	-0.24	0.39	0.11
第Ⅳ因子：重要性への認知 $\alpha=0.61$					
15	外来語が使えないと、日本人とうまく会話ができない	-0.06	-0.06	-0.11	0.64
12	外来語をもっと知らないと、日本語が上達しない	0.16	0.00	0.01	0.60
16	新しい物事や概念を表すには、外来語が欠かせない	-0.01	0.05	0.16	0.51
因子間相関		Ⅱ	0.21		
		Ⅲ	-0.10	0.05	
		Ⅳ	0.20	0.19	0.26

以上のように、外来語に対して台湾人日本語学習者が持つ学習観については、本研究の調査より〈学習困難度〉、〈英語の貢献〉、〈自律的学習〉、〈重要性への認知〉という4因子を導き出すことができた。これらは、質問紙を作成する際に想定した4つの下位カテゴリーと一致していることが示された。また、因子の信頼性を確認するため、因子ごとに α 係数を求めたところ(表1)、第Ⅰ因子 $\alpha=0.87$ 、第Ⅱ因子 $\alpha=0.85$ 、第Ⅲ因子 $\alpha=0.61$ 、第Ⅳ因子 $\alpha=0.61$ と、それぞれに整合性が認められた⁴。

⁴ α 係数が.80以上の場合は、尺度の内的整合性が高いと判断され、.50を切るような尺度の場合は再検討する必要があるとされている。また、個人レベ

4.2 外来語の学習観とその習得との関係についての検討

本研究では、外来語に対する学習観が外来語の習得に与える影響について、質問紙の探索因子分析と外来語の語彙テストの結果を基に構造方程式モデリング (SEM) を用いて検討した。分析には、IBM SPSS Amos 21.0 を使用し、学習観の 4 因子と外来語の習熟度を別個の潜在変数とし、各因子においてそれぞれの因子を代表する上位 3 位までの項目⁵ (前掲表 1 参照)、すなわち〈学習困難度〉の項目 8、項目 10、項目 11、〈英語の貢献〉の項目 41、項目 39、項目 37、〈自律的学習〉の項目 24、項目 25、項目 26、〈重要性への認知〉の項目 15、項目 12、項目 16、及び語彙テストの下位カテゴリーの得点を観測変数として扱うことにした。構造方程式モデルでは、変数間の因果的なパス関係や相関関係を想定した上で、そのモデル全体が当該データによく適合しているかどうかを検証することができる。本研究では、潜在変数間の影響関係を想定するにあたって、外来語の語彙テストによって測定された外来語の習熟度に対して、学習観の 4 因子からそれぞれパスを設定した。一方、学習観の 4 因子間の関係については、まず相関関係を仮定した。

また、構造方程式モデリングの適合度指標については、GFI=0.90 以上、AGFI=0.90 以上、CFI=0.90 以上、RMSEA=0.05 以下、及びカイ二乗適合度検定による有意性の判定がモデルの受容基準としてよく用いられる。しかし、カイ二乗適合度検定は、サンプル数に左右され易い指標であり、サンプル数が多くなると有意になり易いという性質がある (Jöreskog & Sörbom 1993; 豊田 2011)。この問題を避け

ルの調査データでは、.60 以上ならば許容できる水準であるとされている (村瀬・高田・広瀬 2007)。これに基づき、本研究で導き出した 4 つの因子の α 係数は全て .60 以上となり、尺度としての内的整合性は許容範囲内であると言える。

⁵ 構造方程式モデリングで分析する際、因子を構成する項目数が多い場合は、適合度の高いモデリングが困難であるため、分析者によっては、内的整合性の高い項目を合算して 1 個の観測変数とすることがあり (例えば、要 2005 など)、または因子を構成する項目の中から、負荷量が最も安定している上位項目を観測変数とすることもある (例えば、中山 2005 など)。本研究では、後者の方法を採用し、各因子の負荷量上位 3 位までの項目を観測変数とする。

るために、Jöreskog and Sörbom (1993) は、 χ^2/df が 2 以下であれば、よく適合しており、2 から 3 であれば許容できる程度の適合であるという基準を提案している。そこで、本研究では、本調査の参加者が 335 名にのぼることを考慮し、カイ二乗適合度検定による有意性の判定を主たる指標としては用いず、前述した GFI、AGFI、CFI、RMSEA といった指標に加え、 $\chi^2/df=2$ 以下をモデルの適合度指標として用いることにした。

4.2.1 構造方程式モデリング (SEM) による解析結果

構造方程式モデリングの分析結果は図 2 に示した通りである。図 2 のモデル I はカイ二乗適合度検定の χ^2 値が有意 [$N=335$, $\chi^2(94)=154.527$, $p<.001$] であったが、その χ^2/df 値が 1.644 で 2 以下であるため、データがモデルとよく適合しており、モデルを有効に説明していると言える。また、各適合度指標は GFI が .946、AGFI が .923、CFI が .954、RMSEA が .044 で良好な適合度を示した。このように、検定と全ての指標の結果から、図 2 のモデル I とデータの適合度が良好であることが実証された。そこで、モデル I における潜在変数間の影響関係については、図 2 にしたがって検討していく。

〈学習困難度〉から外来語の習熟度へのパス ($\beta=-0.12$, $p=n. s.$)、〈重要性への認知〉から外来語の習熟度へのパス ($\beta=0.13$, $p=n. s.$) はいずれも有意ではなかったことから、外来語の習熟度に対して、〈学習困難度〉と〈重要性への認知〉はそれぞれ有意な影響を与えていないことが分かった。それらに対し、〈自律的学習〉から外来語の習熟度へのパス ($\beta=0.42$, $p<.001$) は有意であり、〈自律的学習〉は外来語の習熟度に有意な正の影響を及ぼしていることが認められた。一方、〈英語の貢献〉から外来語の習熟度へのパス ($\beta=-0.22$, $p<.01$) は有意であったが、負の係数を示したことから、〈英語の貢献〉は外来語の習熟度に有意な負の影響を及ぼしていることが認められた。また、外来語の学習観に関する〈学習困難度〉、〈重要性への認知〉、〈自律的学習〉、〈英語の貢献〉については、一定の方向の因果関係を想定せず、相関関係を仮定して検討したところ、〈重要性

への認知)と〈自律的学習〉($r=.33, p<.01$)、〈重要性への認知)と〈学習困難度〉($r=.17, p<.05$)、〈重要性への認知)と〈英語の貢献〉($r=.18, p<.05$)の間にはそれぞれ有意な正の相関が見られたが、その他の要因間には有意な相関が見られなかった($rs=-.10\sim.14, ps=n. s.$)。

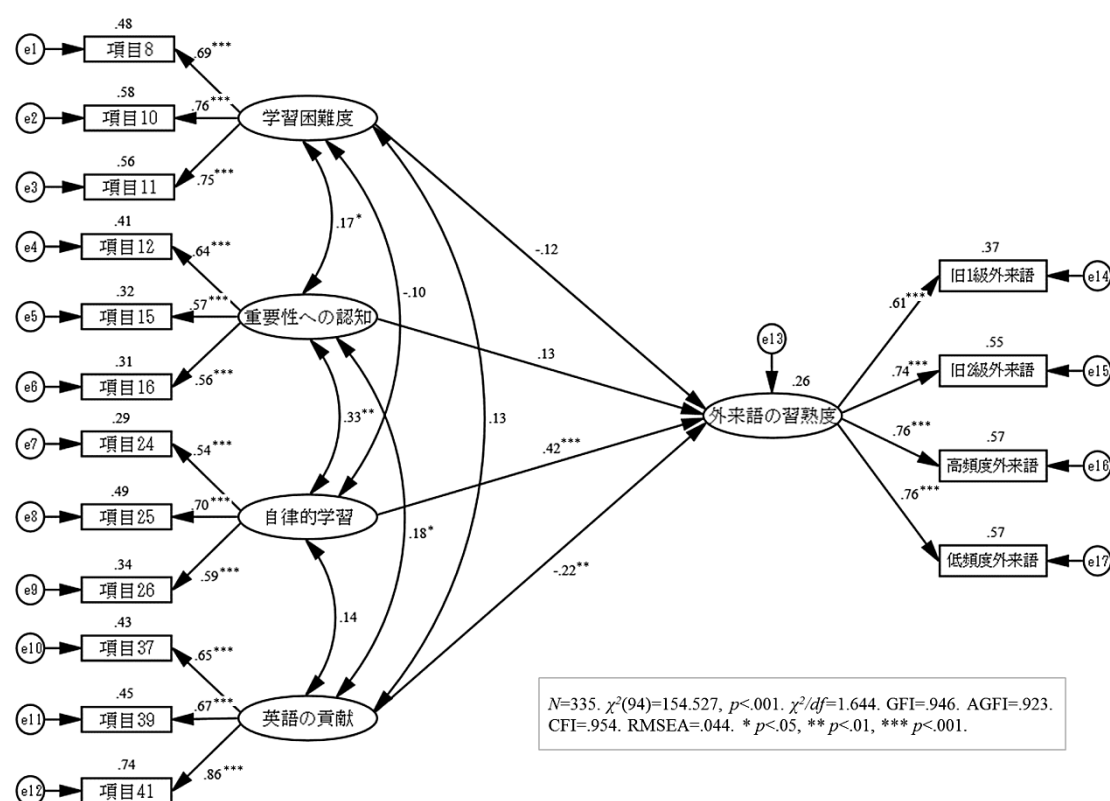


図 2 外来語に対する学習観と外来語の習得との関係：モデル I

以上のように、本研究では構造方程式モデリングで分析を行う際に、学習観を構成する〈学習困難度〉、〈重要性への認知〉、〈自律的学習〉、〈英語の貢献〉と外来語の習熟度の中に直接のパスを想定して検討した結果、外来語の習熟度は〈自律的学習〉から正の影響、〈英語の貢献〉から負の影響を受けていることが明らかになった。〈学習困難度〉と〈重要性への認知〉は外来語の習熟度に直接的な影響を与えていなかったが、〈自律的学習〉と〈英語の貢献〉との間に相関関係が見られたことから、それらを介して外来語の習熟度に間接的な影響を与えている可能性がうかがわれる。この点を確認す

るため、次の節でモデルについて再検討を行う。

4.2.2 モデルの再検討

本節では、前節の結果を踏まえ、外来語の学習観を構成する〈学習困難度〉、〈重要性への認知〉、〈自律的学習〉、〈英語の貢献〉のうち、〈学習困難度〉と〈重要性への認知〉は〈自律的学習〉や〈英語の貢献〉を介して外来語の習熟度に影響を与えているというモデルを仮定し、構造方程式モデリングによる分析で再検討した。修正指数や各適合度指標をもとにモデルの修正を繰り返し、最終的に図 3 に示すモデルⅡが導き出された。図 3 のモデルⅡはカイ二乗適合度検定の χ^2 値が有意 [$\chi^2(96)=158.529, p<.001$]であったが、 χ^2/df 値が 2 以下の 1.651 であるため、モデルとデータがよく適合していると言える。また、各適合度指標は GFI が .945、AGFI が .922、CFI が .953、RMSEA が .044 となり、モデルがデータに対してあてはまりが良いことが示された。以下では、モデルⅡにおける潜在変数間の影響関係について検討する。

図 3 に示した通りに、〈英語の貢献〉から〈自律的学習〉へのパス ($\beta=0.10, p=n. s.$) は有意ではなかったが、外来語の習熟度へのパス ($\beta=-0.22, p<.01$) は図 2 のモデルⅠと同様に有意な負の係数を示した。このことから、〈英語の貢献〉は〈自律的学習〉に有意な影響を与えてはいなかったものの、外来語の習熟度に有意な負の影響を及ぼしていることが認められた。〈重要性への認知〉から〈自律的学習〉へのパス ($\beta=0.36, p<.001$) は有意な正の係数を示したのに対し、〈学習困難度〉から〈自律的学習〉へのパス ($\beta=-0.20, p<.05$) は有意な負の係数を示したことから、〈自律的学習〉は〈重要性への認知〉から正の影響を受けているが、〈学習困難度〉から負の影響を受けていることが示された。〈自律的学習〉から外来語の習熟度へのパス ($\beta=0.49, p<.001$) においては有意な正の係数を示し、〈自律的学習〉は外来語の習熟度に有意な正の影響を与えていることが認められた。また、これらの結果から、〈学習困難度〉と〈重要性への認知〉は、両者ともに〈自律的学習〉を介して、外来語の習熟度に

影響していることが示された。

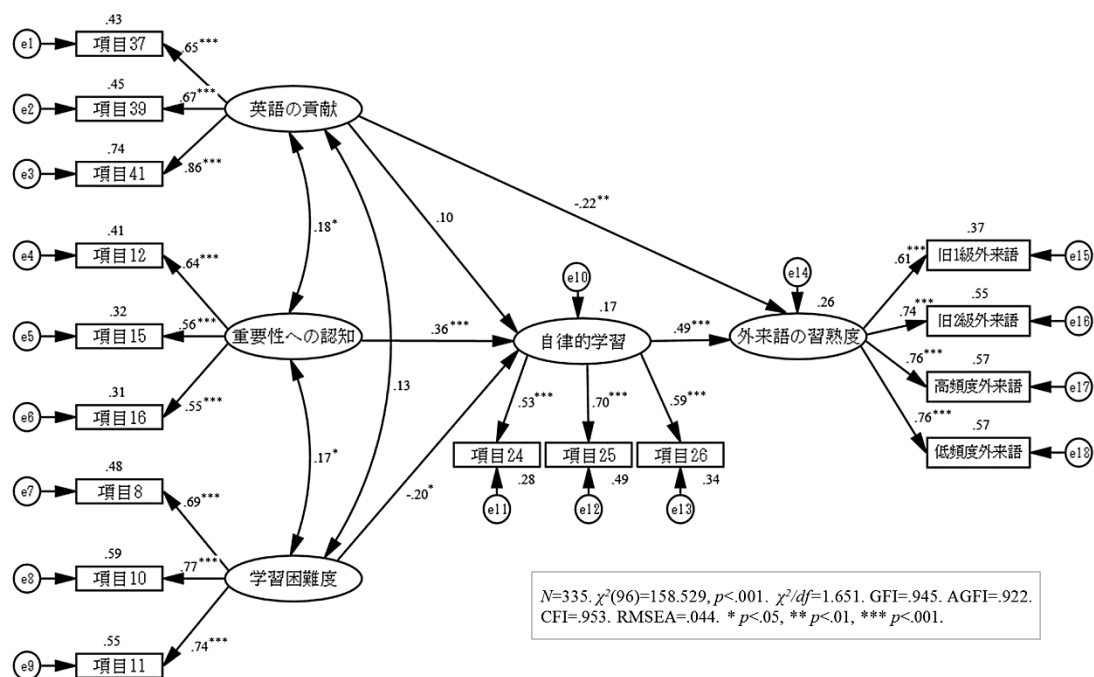


図 3 外来語に対する学習観と外来語の習得との関係：モデル II

一方、本研究で得たデータに最も適合するモデルは、本節で再検討したモデル II であるか、もしくは前節で検討したモデル I (図 2) であるかを確認するために、両モデルについてはモデルの相対的な良さを評価するための指標となる AIC、BIC、CAIC、ECVI を比較することにした。表 2 はモデル I とモデル II に関する AIC、BIC、CAIC、ECVI の値を示したものである。

表 2 に示したように、AIC と ECVI においては、モデル I とモデル II がそれぞれ同じ数値となっているが、BIC と CAIC においては、モデル II のほうがモデル I よりも値が小さかった。各指標の値が小さいほど適合度が高いことを意味することから、特定の因果関係を想定して再検討した図 3 のモデル II のほうが図 2 のモデル I よりも、本研究で得たデータに最も適合したモデルであることを示した。これより、以下の考察では図 3 のモデル II にしたがって検討していく。

表 2 モデル I とモデル II の比較

	AIC	BIC	CAIC	ECVI
モデル I (図 2)	238.53	398.72	440.72	0.71
モデル II (図 3)	238.53	391.09	431.09	0.71

注：各指標の値が小さいほど適合度が高いことを表す。

4.3 考察

本研究では、台湾人日本語学習者の外来語に対する学習観が外来語の習得に及ぼす影響を探るために、質問紙調査と外来語の語彙テストを実施した。その結果、研究課題 (1) 「台湾人日本語学習者が外来語に対してどのような学習観を持っているのか」については、〈学習困難度〉、〈英語の貢献〉、〈自律的学習〉、〈重要性への認知〉という 4 因子を導き出すことができた。次の研究課題 (2) 「その学習観が外来語の習得にどのような影響を与えるか」については、質問紙調査の因子分析の結果と外来語の習熟度を測定するために実施した外来語の語彙テストの得点との関係を構造方程式モデリングで検討したところ、図 3 に示した最終的なモデル II の結果が得られた。以下では、その結果について考察を行う。

第 1 に、〈英語の貢献〉は外来語の習熟度に対して抑制する方向で影響を及ぼしていることが示された。このことから、外来語の学習が既に学習した英語の語彙知識と関連するという意識を強く持っているほど、外来語の習得を促進するどころか、かえって阻害するように働いていることが示唆された。外来語の中では英語由来のものが約 8 割以上を占めているが (石綿 1991、玉村 1991)、その中には英語との表記や発音や意味のずれがある語が多いため、学習経験のある英語の語彙知識が必ずしも外来語を学習する際の助けになるとは限らない。また、英語ができる日本語学習者は、「外来語の意味を英語で推測するのは簡単だ」「外来語の意味は英語と似ている」など、外来語の意味は英語で推測すれば良いという思い込みを強く持っている場合、外来語の学習に対してあまり努力を払わなくなる可能性

があり、その影響で外来語の習熟度が上がらなくなってしまうと考えられる。この結果は、外来語を日本語の語彙として認識して学習する必要があり、英語の語彙知識にばかり頼っていると、外来語の習得が進まなくなること示唆している。

第2に、〈学習困難度〉は〈自律的学習〉に対して抑制する働きをしており、またそれを介して外来語の習熟度に影響を及ぼしていることが示された。これは、日本語学習者は外来語が難しいと強く意識しているほど、自ら外来語を学習する意欲を低下させるように作用することになり、その影響で外来語の習熟度も上がりにくくなることが示唆された。「日本語の語彙の中で、外来語は最も覚えにくい」「新しい外来語がどんどん増えているので、それを覚えるのは大変だ」「外来語を努力して覚えても、すぐに忘れてしまう」など、外来語を覚えるのが難しく、さらに覚えても忘れてしまうと思いついてしまうと、勉強する気がなくなってしまうのであろう。特に外来語は、和語や漢語などに比べ、学習者の母語である中国語との近似性が低く、陣内（2008）が中国語は世界の言語の中で外来語から最も遠い存在の一つであると指摘したように、学習者が持つ中国語の漢字知識は外来語の学習に全く役立たないことから、外来語学習を特に難しく感じているのであろう。このことから、外来語の習熟度を高めるには、日本語学習者の外来語に対する苦手意識を軽減する必要があると考えられる。

第3に、〈重要性への認知〉は〈自律的学習〉を促進する効果が見られ、さらにそれを介して外来語の習熟度に影響していることが示された。「外来語が使えないと、日本人とうまく会話ができない」「外来語をもっと知らないと、日本語が上達しない」などのように思っている日本語学習者は、目標を達成するために、自ら重要だと認識している外来語への学習に力を入れるのであろう。つまり、外来語が日本語の語彙として重要だと高く意識しているほど、外来語を積極的に学ぼうとする意欲を高めるように作用することになり、結果として外来語の習熟度にも影響を及ぼしたと考えられる。このことは、

外来語の習熟度を高めるには、外来語が日本語を学習する際に避けて通れない、重要なものであるということを日本語学習者に認識させる必要があることを示唆した。

第4に、〈自律的学習〉は外来語の習熟度に最も貢献しており、習得の成果を左右する重要な要因であることが示された。つまり、「授業以外でも外来語の自習が必要である」「もっと外来語を理解して使用したい」「知らない外来語に出会ったら、その意味を調べたり人に尋ねたりすることがよくある」など、外来語を熱心に学習に取り組みたいという意識が強いほど、外来語の習得を大きく促進することになる。本研究で得られたこの結果は、外来語学習についてのものではあるが、日本語学習に対する学習観を調査した盧（2011）で観察された、日本語習熟度の高い群は日本語習熟度の低い群より自律性に対する意識が有意に高かったという結果を、裏付けるものになれると考えられる。また、中山ほか（2008）の調査によれば、日本語教育現場においては、外来語は時間的制約などの理由からその大部分が日本語学習者の自学自習に委ねられてきたという現状がある。このような状況下で、日本語学習者が外来語に対する学習意欲を保ち続けて、自分に適した方法で学習に取り組むことが、外来語学習の成功につながる重要な鍵であると言える。本研究の結果はこの現状を反映するようなものとなった。

以上のように、日本語学習者の外来語に対する学習観がその習得に影響を与えており、中には抑制的に働く要因と促進的に働く要因と大きく二つに分かれている。〈英語の貢献〉〈学習困難度〉は抑制的に働く要因であり、〈重要性への認知〉〈自律的学習〉は促進的に働く要因であるが、〈学習困難度〉と〈重要性への認知〉は外来語の習得に間接的に影響している要因である。外来語の習得に直接に影響しているのは〈英語の貢献〉と〈自律的学習〉であり、中でも特に〈自律的学習〉が与える影響が最も大きかったことが明らかになった。

5. まとめと今後の課題

本研究では、これまで外来語に関する学習観の研究で対象にされてこなかった学習観が及ぼす習得への影響に焦点を当て、台湾人日本語学習者に対して外来語の学習観調査と語彙テストを実施し、学習観と語彙テストから導かれる外来語の習熟度との関係を構造方程式モデリングの手法で検討した。その結果、外来語の学習観から抽出した〈学習困難度〉、〈英語の貢献〉、〈自律的学習〉、〈重要性への認知〉はいずれも外来語の習熟度に影響を及ぼしているが、〈自律的学習〉が最も貢献していること、〈英語の貢献〉が抑制する働きをしていること、〈学習困難度〉と〈重要性への認知〉が両方とも〈自律的学習〉を介して間接的な影響を与えていることが明らかになり、〈自律的学習〉に関する意識が学習観の中で外来語の習得を促進する最も重要な要素であることが示唆された。

このことから、外来語の習得を促進するためには、以下の4点が日本語教育への示唆として考えられる。第1に、外来語の学習が重要であることを日本語学習者に理解してもらうことである。外来語は流動が甚だしい語種であるが、日本の言語社会において不可欠で重要な位置を占めている。このような重要性は、日常生活でも外来語に触れる機会が多い、日本語を第二言語として学ぶ学習者（JSL, Japanese as a Second Language）に比べて、普段教室での習得を中心とする、日本語を外国語として学ぶ学習者（JFL, Japanese as a Foreign Language）にとって身を持って知る機会が少ないのが現実である。とりわけ、JFL 学習者の日本語学習に大きく影響する教科書には和語や漢語の出現率が外来語よりはるかに高いことから、外来語の重要性を学習者が軽視してしまうおそれがあると考えられる。こうした事態を避けるには、教師は学習者に外来語が担う役割やその使用現状などを説明し、その学習の重要性を認識させておく必要があるであろう。第2に、英語の語彙知識に頼りすぎず、外来語を日本語の語彙として学習する必要がある。外来語の中で英語由来のものが圧倒的に多いが、その発音や表記は日本語の音韻体系に合わ

せて変化したため、英語の語彙知識を援用して学習することは容易ではない。また、知らない外来語に遭遇したときに、英語からその意味をある程度推測することができるが、意味上にずれがある外来語の場合や原語が英語でない場合は、誤推や理解の失敗に繋がりやすい。したがって、外来語を英語と関連付けさせるような捉え方よりは、教師は学習者に日本語としての外来語の語意や用法に着目させて、外来語としての特徴や日本語化の規則を考えさせることが重要であろう。第3に、日本語学習者の外来語に対する苦手意識を軽減するよう、現行の外来語教育を改めて考え直す必要があるだろう。外来語には学習者にとって学習していく上で頭を悩まされる部分がたくさんある。例えば、和語や漢語に見られない「チェ」「シェ」「ジェ」「ファ」「フィ」「フォ」などのような発音や表記があり、さらに表記のゆれや語形の短縮や品詞の変化などがある。しかしながら、日本語教育現場では、外来語に対する語彙教育の比重は和語や漢語に比べ、比較的軽視される傾向にあり、こうした教育姿勢が学習者の外来語の読み書きが難しいという意識を形成する要因の一つになっているとも指摘されている（中山ほか 2008）。このような実態を改善するには、教師は外来語をほかの語彙と同等に扱い、外来語の指導を適度に行うようにする必要があるであろう。例えば、音節が長く、発音しにくい語に対する発音の指導や、聞き取りにくい語に対する聞き取りの練習、特殊な表記に対する注意喚起などである。第4に、最も重要なのは外来語の学習に取り組みたいという意識を強く持たせるべきである。JFL 学習者の多くは教科書に沿って学習を進めている。しかし、教科書に掲載されている外来語の割合は10.25～16.92%であり（林 2011）、さらに初級から上級までの日本語教科書にある外来語は新聞に多用される外来語と重なる語が3分の1しかないという（中山 2001）。このことから、教科書のみによって学習するのは不十分であり、教科書以外のものを学習材料として自ら進んで学習に取り組むべきである。こうした外来語に対する学習意欲を喚起する手段としては、教師は学習者の興味を引き出せ

るような趣味の雑誌やバラエティ番組やニュースやドラマなどから、外来語が多く含まれるものを選び出して、それを教材に取り入れる工夫を心がける必要があると考えられる。また、教室活動としては、語彙連想に関する産出課題(例:食べ物に関する外来語を20個書く)を与えたり、和語・漢語と類義関係を持つ外来語を見つけ出させたりすることによって、学習者の語彙ネットワーク形成を支援することができ、なおかつ自主的な学習を促す可能性があるであろう。

一方で、今回の調査は、日本語学習者だけに焦点を絞って考察してきた。しかし、実際の教育現場においては、日本語学習者への外来語指導には、日本語教師の外来語に対する学習観が反映されると考えられる。日本語教師と日本語学習者との間で学習観のずれがあるのかを明らかにすることで、教師が教育現場において学習者の外来語学習をどのようにサポートするか、教授内容をどのように調整するかという重要な手掛かりを得ることができる。今後は、台湾の日本語教師を対象とした外来語学習の意識調査を進めていきたいと考えている。日本語学習者および日本語教育者双方の意識調査結果を合わせ見ることによって、台湾の日本語教育における外来語教育に対する具体的な改善策の提案が期待できるであろう。

付記

本稿は、2015年11月に(台湾台北市)東呉大学で開催された「2015年度台湾日本語教育研究国際シンポジウム」で行った口頭発表に、大幅な加筆と修正を施したものである。本研究の調査にご協力いただいた先生方、学生の皆様に深く感謝いたします。また、貴重なコメントをくださった査読者の方々に心より御礼を申し上げます。なお、本研究は103年度科技部專題研究「台灣日語學習者的日語外來語學習觀與其語彙理解之研究」(MOST 103-2410-H-216-002)による研究成果の一部である。

参考文献

- 石橋玲子 (2006) 「日本語学習者の文章産出に関する beliefs」『茨城大学留学生センター紀要』4、茨城大学、pp. 1-11
- 石綿敏雄 (1991) 「外来語と漢語・外来語の語源」『日本語教育』97、日本語教育学会、pp. 1-12
- 尹松 (2001) 「日本語学習者のビリーフについての意識調査－中国首都師範大学の場合」『日本語教育研究』41、言語文化研究所、pp. 115-129
- 王敏東 (2015) 「台湾人初級日本語学習者の外来語意識についての一考察」『台湾日本語文学報』38、台湾日本語文学会、pp. 277-303
- 岡崎眸・堀和佳子 (2000) 「言語学習についての確信－韓国人日本語学習者の場合」『お茶の水女子大学人文科学紀要』53、お茶の水女子大学、pp. 185-201
- 要弥由美 (2005) 「社会的位置付けを持った日本語教師のビリーフ・システム－構造方程式モデリング (SEM) によるモデル化とその考察」『日本語教育』127、日本語教育学会、pp. 11-20
- 魏志珍 (2016) 「日本語における外来語の語彙テストの開発への試み」『台湾日語教育学報』26、台湾日語教育学会、pp. 78-107
- 陣内正敬 (2008) 「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11、関西学院大学、pp. 47-60
- 玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀真・林炫情 (2011) 「韓国語を母語とする日本語学習者の語彙知識がオノマトペの習得に与える影響」『言語教育評価研究』2、桜美林大学、pp. 36-41
- 玉村文郎 (1991) 「日本語における外来要素と外来語」『日本語教育』74、日本語教育学会、pp. 13-27
- 豊田秀樹 (2011) 『共分散構造分析 [Amos 編]－構造方程式モデリングー』東京：東京図書株式会社
- 中山晃 (2005) 「日本人大学生の英語学習における目標志向性と学習観および学習方略の関係のモデル化とその検討」『教育心理学研究』53、日本教育心理学会、pp. 320-330

- 中山恵利子 (2001) 「日本語教科書の外来語と新聞の外来語」『日本語教育』109、日本語教育学会、pp. 90-99
- 中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子 (2008) 「日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方」『日本語教育』138、日本語教育学会、pp. 83-91
- 初相娟・玉岡賀津雄 (2013) 「中国人日本語学習者による語彙・文法知識から述部構造の理解を仲介とした読解への因果関係モデルの検証」『ことばの科学』26、名古屋大学言語文化研究会、pp. 5-24
- 堀切友紀子 (2008) 「日本語学習者の外来語に対する苦手意識と受容態度－英語母語話者の場合」『異文化間教育』2、異文化間教育学会、pp. 74-86
- 堀切友紀子 (2010) 「英語を母語とする日本語学習者の外来語使用行動の実態とその背景要因」『言語文化と日本語教育』39、お茶の水女子大学日本言語文化学会、pp. 104-111
- 堀切友紀子 (2011) 「英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する認識・感情・行動と異文化受容態度との関連」『人間文化創成科学論叢』14、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、pp. 187-195
- 村瀬洋一・高田洋・廣瀬毅士 (2007) 『SPSS による多変量解析』オーム社
- 林玉恵 (2011) 「台湾で使用されている日本語初級教科書の外来語の実態と問題点」『語彙研究』8、語彙研究会、pp. 57-67
- 盧錦姫 (2011) 「台湾の大学生の日本語学習ビリーフと学習ストラテジーに関する調査研究－日本語専攻者を中心として」『台湾日本語文学報』30、台湾日本語文学会、pp. 369-392
- Horwitz, E. K. (1987) Surveying students beliefs about language learning. In A. Wenden, & J. Rubin (Eds.) *Learner strategies in language learning*. London: Prentice Hall. pp. 119-129.
- Jöreskog, K., & Sörbom, D. (1993) *LISREL8: Structural Equation Modeling with the SIMPLIS Command Language*. Chicago, IL:

付錄

【外來語的學習意識調查表】

以下問題是想瞭解您對於外來語學習的看法。請您仔細閱讀下列每項問題後，依照您的想法從「非常不同意」～「非常同意」這1～5的數字選項中圈選出一個合適的選項。

項 目	非常不同意	不同意	普通	同意	非常同意
1. 外來語不易發音，說話時要正確地發音較為困難	1	2	3	4	5
2. 在閱讀時，外來語單字的意思比其他單字更難以推測	1	2	3	4	5
3. 以片假名表記的外來語不容易記，要正確地書寫較為困難	1	2	3	4	5
4. 在聽日語或對話時，外來語比其他單字更難以正確聽取	1	2	3	4	5
5. 日語的語彙當中，外來語是最難以發音的	1	2	3	4	5
6. 外來語單字的表記越長，就越無法正確地書寫	1	2	3	4	5
7. 即使記住外來語，我在對話或書寫文章時仍不會適當地使用	1	2	3	4	5
8. 日語的語彙當中，外來語是最難記住的	1	2	3	4	5
9. 外來語不管再怎麼學習，自己會使用的外來語仍是有限的	1	2	3	4	5
10. 新的外來語不斷地增加，要記住這些外來語很吃力	1	2	3	4	5
11. 外來語就算努力地背，還是很快就忘記	1	2	3	4	5
12. 若不多懂些外來語，日語是無法進步的	1	2	3	4	5
13. 日語中有太多外來語，有必要對此作些規範	1	2	3	4	5
14. 外來語的意思容易產生誤解，所以儘量不要使用比較好	1	2	3	4	5
15. 若不會使用外來語，就無法順利和日本人對話	1	2	3	4	5
16. 要表達新的事物或者概念，外來語是不可或缺的	1	2	3	4	5
17. 使用外來語的機會並不多，因此不需要去記	1	2	3	4	5
18. 外來語非常方便，可以再多增加一些	1	2	3	4	5
19. 作為日語語彙的一部分，外來語是理應存在的	1	2	3	4	5
20. 用其他的單字來替代外來語是比較好的	1	2	3	4	5

21. 日語的語彙當中，我最討厭外來語·····	1	2	3	4	5
22. 若有外來語的教科書，即使沒有老師教，我也能自己學習·····	1	2	3	4	5
23. 若課堂中沒有教外來語，我無法靠自己學習·····	1	2	3	4	5
24. 若遇到不認識的外來語，我常會主動查那單字的意思或者請教他人·····	1	2	3	4	5
25. 我想更加理解並且多使用外來語·····	1	2	3	4	5
26. 在課堂之外也必須自學外來語·····	1	2	3	4	5
27. 自己決定外來語的學習方法以及進度是最有效果的·····	1	2	3	4	5
28. 我平常只會學習課本中所出現的外來語單字·····	1	2	3	4	5
29. 外來語的學習由老師來指導是比較好的·····	1	2	3	4	5
30. 查詢外來語的意思是很麻煩的·····	1	2	3	4	5
31. 字典查不到的外來語單字很多，因此要自學較為困難·····	1	2	3	4	5
32. 如果知道外來語的字源，就會比較容易學習·····	1	2	3	4	5
33. 英語拿手的人想必外來語也拿手·····	1	2	3	4	5
34. 如果會英語，外來語學習就不太需要努力·····	1	2	3	4	5
35. 若遇到不認識的外來語，就用英語去推測那單字的意思即可·····	1	2	3	4	5
36. 英語差的人，就算再怎麼學習外來語也不會進步·····	1	2	3	4	5
37. 外來語的意思和英語相近·····	1	2	3	4	5
38. 英語的語彙知識有助於外來語的學習·····	1	2	3	4	5
39. 透過英語來學習外來語會比較有效率·····	1	2	3	4	5
40. 英語能力和外來語學習是有強烈關連的·····	1	2	3	4	5
41. 外來語的意思用英語來推測是簡單的·····	1	2	3	4	5
42. 外來語的發音和英語相近·····	1	2	3	4	5